

次の文章は、田中大介^{たなかだいすけ}「待ち合わせの変容」(二〇一〇年発表)の一部である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で表記を一部改めている。(配点 45)

1 あの人と会えるだろうか……。きっと会える。いや、会えないかもしれない……。待ち合わせには多かれ少なかれこうした期待と不安が交錯している。相手が絶対に来ないと知りつつ待ち続ける場合を除けば、人が待ち合わせ場所に行くのは、相手が来ると期待しているからであり、相手が待ち合わせ場所に来るのは、自分もそこに行く^(ア)と相手が期待しているからである。ということは、相手が来るといふ自分の期待は、自分も行くという相乗期待に^(イ)イキョとしており、逆もまた同様となる。つまり、待ち合わせの成立は「期待の期待」というかたちで相乗化され、理論上、無限後退していくような不安定な事態なのだ。

A はたして「会うことはいかにして可能か」。この待ち合わせにまつわる期待と不安は、「社会全体はいかにして可能か」という定式で知られ、社会(学)の起源に位置する秩序問題に触れている。秩序問題は、トマス・ホップス——「万人の万人に対する闘争」という自然状態と、その解決としての社会契約——を遡及的に經由してタルコット・パーソンズにより定式化された「二重の不確定性」(double contingency)以来、ニクラス・ルーマンらによって複数のレベルで盛んに議論されてきた。ここでそれら全てに触れることはできないが、さしあたり二重の不確定性とは、ひとことではいえず、他者の行為の成否が自分の行為次第であり、自己の行為の成否が他者の行為次第であるような両すくみのコミュニケーションのことである。待ち合わせがつきつける不安は、このコミュニケーションの本源的な不確定性、すなわち自明のように感じられている「社会」の底が抜けているかもしれないと告げる囁き^{ささや}のようなものだ。

15 しかし、私たちは日々、人と会っている。では、私たちは、どのようにしてそうした囁きを振り払って、待ち合わせへと出かけているのだろうか。

普段、何気なく行^{おこ}なっている待ち合わせだが、二つ以上の身体が時と場を合わせるにはそれなりに慎重なコミュニケーションを必要としている。とりわけ現在では、モバイルテクノロジーが浸透するにしたがって、待ち合わせというコミュニケーションが変容し始めている。たとえば、二〇〇七年、地下鉄開通八〇周年のポスター^(注5)が東京メトロの各駅に貼り出された。そのなかには渋谷ハチ公像を撮った(少なくとも一九八九年以前の)古い写真が使われているものがある。現在とは異なり北を向いたハチ公像の後姿が映し出され、「ケータイがなかったあの頃は、今より、人気者でした」というキャプションがついている。これはどういう意味だろうか。

本稿では、すでに多くが語られているつながり志向のケータイ研究とは異なり、現代の待ち合わせにおいて現れる時間・空間形態の変容を考えることで、社会の起源と交差するメディア・コミュニケーションの現在を考える^(注6)たい。

25 あらかじめ「待ち合わせ」というコミュニケーションを限定しておく。待ち合わせとは、別の場所にいる複数の身体が、それぞれの身体が存在していた場所以外の場所へ移動し、場を共有することとする。したがって、待ち合わせは、ある身体が別の身体が存在する空間(住居、職場等)に一方方向的に移動する「訪問」とは区別される。つまり、待ち合わせとは、後続するコミュニケーションを導くための「中間」にあり(待ち合わせたらそれでサヨナラ³⁰ラというのは特異な状況だろう)、待ち合わせ場所とは、別の場所に存在する複数の身体の「中間地点」ということができる。

35 さて、B 待ち合わせという中間的なコミュニケーションは、すべての社会において同じように重要なわけではない。たとえば、限定された活動パターンと閉じた活動範囲で成立する共同体では、集団のメンバーの各身体³⁵の所在地や活動の時間的パターンを比較的容易に把握・予期できる。したがって、共同体における待ち合わせの必要性はあまり高くないだろう。

一方、相互の活動内容や活動範囲を把握していない共同体間のコミュニケーションにおいては、時間と空間をあわせる待ち合わせが必要になる。諸身体³⁵の活動範囲や活動パターンが分化すれば、相互の所在地や活動の時間的パターンの把握・予測が難しい。そのため、個別の活動をする複数の身体が共通の指標をもとに^{あらかじめ}予め時間

空間を合わせなければ、出会いは(イ)グウゼンに委ねられるほかない。つまり、個別の活動に従事する複数の身体が共通参画できる数量として均質化した時間と、離れた場所に存在する個別の身体が共有知識として了解した中間地点——すなわち、クロックタイムとランドマークを用いた待ち合わせが必要となる。それと表裏の関係にあるのが、遅れを逸脱としてまなざす規範と、それに伴って現れる遅れに対するストレス、すなわち「遅刻」という観念の成立である。したがって、待ち合わせは、各身体の活動領域が個別化するほど拡大し、機能分化した近代の都市や地域において、より自立したコミュニケーション形式として要請される。

45 では、近代の待ち合わせはどのようなコミュニケーションだったのか。日本で最も知られた待ち合わせ場所であるハチ公像を例に考えてみよう。

ハチとは東京帝国大学教授上野英三郎(注7)が飼っていた秋田犬のオスである。ハチは、外出する上野を渋谷駅まで見送り、大正一四(一九二五)年五月、上野が講義中に亡くなった後も、渋谷駅に立ち寄り続けた。上野の帰りを待ち続けるハチの姿は「忠犬」と讃えられる。このハチ公の物語は、昭和七(一九三二年)一月四日(注8)の東京朝日新聞に「いとしゃ老犬物語、今は世になき主人の帰りを待ちかねる七年間」という記事が投稿されたことをきっかけにして広がったもので、昭和九(一九三四)年四月には渋谷駅前にハチの銅像が建立された。さらにハチが死亡した昭和一一(一九三六)年以降、毎年、慰霊祭がハチ公像前で行なわれ、ハチ公像は儀礼を通して象徴化されることになる。

ただし、「忠犬ハチ公」の神話には異説も存在している。死亡後のハチの胃から焼き鳥串が発見されたことをもって、ハチは駅前で焼き鳥をもらうために渋谷駅に通っていたとする説である。問題は、「忠犬ハチ公」説と「動物ハチ公」説の正誤ではなく、なぜ「忠犬ハチ公」神話もってもらいものとして普及したのかだろう。

たとえば、昭和三〇(一九五五)年の読売新聞の記事「ハチ公に変わらぬ愛と真心」では、「ハチ公のまわりにはハチ公にかわって昼も夜も常に百人近いシン(ウ)ケンなヒトミが改札口のほうをみつめている。待ち人の来るや来ずや……」(読売新聞一九五五年五月二六日)と書かれ、待ち合わせをする人々がハチ公に重ねあわされている。

60 このハチ公という象徴に仮託されている待ち合わせの意味は、たとえば以下のようなものである。「盛り場のなかの小さな広場／せまい空の下のベンチ／ひと待ち顔は美しく／そして悲しいもの／たとえばそれが／ささやかな約束／あどけないデイト／買い物のおともであっても……」(注9)「待つ」ことで人生をはじめ「待つ」ことで老いていくからです」(朝日新聞一九六〇年九月一九日夕刊、投書「待ち合わせ」)。この投書の待ち合わせは切なく、美しいものとして意味付けられており、「忠犬ハチ公」の物語と通底している。

65 これらの言説は、待ち合わせを「待つこと」として捉えている。待ち人が来るかこないかはわからないし、それは待ち続けないとわからない。待ち合わせとは、そうした長い不安と忍耐の時間的経験であり、ハチ公像とは「コミュニケーションの不確定性に耐える受動性」の空間的象徴なのである。ハチ公神話を——少なくとも戦後のある時期まで——もっともらしく思わせていたもののひとつは、待ち合わせの不確定性に耐える「待つこと」のリアリティだったのである。

70 C しかし、戦後になるとハチ公神話にも変化がみられる。

たとえば、昭和四三(一九六八)年の「忘れられる美談」という記事では、「帰らぬ主人をまつて十年間、じっと座り続けた忠義の物語」を知る人の数も減ったという彫像維持会の幹事さんの言葉をまつてもない。(中略)『キミ、あそこでデートの待ち合わせしかことある?』『ない。あそこきらいなの。なぜって? イヌは、三日飼えば三年恩を忘れないっていうでしょう。わたし、あれがイヤなの。なにが忠犬よ。なれていただけじゃないの。つまり、不潔ってこと』(読売新聞一九六八年三月二四日)。「待つこと」は美しさではなく、執着とされ、反転する。ハチ公が焼き鳥をもらうために渋谷駅に通っていたという「動物ハチ公」という対抗神話は、「なれていただけ」というこの感覚の延長線上にある。

さらに一九八〇年代になると、「渋谷ならハチ公前、新宿の紀伊國屋前、(注10)あまりにも有名な待ち合わせ場所だが、近ごろそうした人待ち場所も変わりつつあるようだ。わかりやすい所というだけでなく、ファッション性や遊び心も場所選びの要素になっている。(中略)スタジオアルタという空間そのものがファッション(とされ)ファッション感覚に敏感な若者たちは、道玄坂の『109』や公園通りで待ち合わせる」(読売新聞一九八六年六月一〇日、「」

内は引用者)。

待ち合わせは、ハチ公が担った「悲しみや美しさ」の重い物語から「ファッション性や遊び心」といった軽やかな記号的イメージの戯れへと転換し、待ち合わせ場所は、そうした記号的イメージの演出される舞台として量産される。すでに新宿では、「シンボルがないために、待ち合わせ場所を演出」(朝日新聞一九七八年九月二〇日)し、⁸⁵交通導線をつくり出す商業地区の活性化が行われている。ハチ公像に対抗して渋谷駅南口にモヤイ像^(注12)が設置されたのも一九八〇年である。

複数の身体が^(エ)タイリユウできる空間を構築し、ファッションブルに演出することで、ハチ公以外のどうとうこのなかつた空間が「待ち合わせ場所」として生産される。そして、そうした「空間の生産」のなかでゾウ^(オ)シヨク⁹⁰し、拡散していく待ち合わせ場所が「新しい／古い」や「オシャレ／ダサイ」といった流行のコードによって意味付けされ、選択されることで、^D待ち合わせは、不確定性と戯れるコミュニケーションとして消費されていたのである。

- (注)
- 1 トマス・ホブズ——イギリスの哲学者(一五八八～一六七九)。
 - 2 タルコット・パーソンズ——アメリカの社会学者(一九〇二～一九七九)。
 - 3 ニクラス・ルーマン——ドイツの社会学者(一九二七～一九九八)。
 - 4 両すくみ——三者が牽制し合って自由に行動できない「三すくみ」からの造語。
 - 5 東京メトロ——東京地下鉄株式会社のこと。
 - 6 メディア・コミュニケーションの現在を考えたい——この文章はこの考察がなされる前の部分にあたる。
 - 7 上野英三郎——日本の農学者(一八七二～一九二五)。
 - 8 東京朝日新聞——日刊新聞である朝日新聞の東日本地区での旧題。大正期には東京五大新聞の一角として数えられた。
 - 9 新宿の紀伊國屋前——新宿駅東口近くにある紀伊國屋書店の新宿本店前。
 - 10 スタジオアルタ——新宿駅東口前のビル新宿アルタの七階にあったスタジオ。ビル壁面には超大型モニターが設置されている。
 - 11 道玄坂の『109』や公園通り——道玄坂は渋谷駅の西口にある坂道で、その登り口にテナントとして『109』がある。公園通りは渋谷駅の北側にある坂道で、店舗などが立ち並ぶ繁華街になっている。
 - 12 交通導線——ここでは人の流れを導く経路のこと。
 - 13 モヤイ像——渋谷駅にある、イースター島のモヤイ像を模した石像のこと。

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。
解答番号は(ア)が1、(イ)が2、(ウ)が3、(エ)が4、(オ)が5。

- | | | | |
|--------------|-------------|----------------|----------------|
| (ア) イキョ | ① イイ諾々として従う | (イ) グウゼン | ① 思わぬ困難にソウグウする |
| ② テンイ無縫なふるまい | | ② ドグウを展示する | |
| ③ イフウ堂々とした行進 | | ③ イソップのグウワを読む | |
| ④ 旧態イゼンの考え方 | | ④ 大都会のイチグウで暮らす | |

- | | | | |
|--------------|-------------|------------|----------|
| (ウ) シンケン | ① ボウケン小説を読む | (エ) タイリユウ | ① 密命をオビる |
| ② ケンドウの試合に出る | | ② 大切な本をカス | |
| ③ 犯人をケンキョする | | ③ 工事がトドコオる | |
| ④ ケンキョな人柄 | | ④ 注意をオコタる | |

- | | |
|-----------------|-----------------|
| (オ) ゾウシヨク | ① フクシヨク業界に興味を持つ |
| ② 車海老をヨウシヨクする | |
| ③ シンシヨクを忘れて勉強する | |
| ④ 本棚をブッシヨクする | |

問2 傍線部A「はたして『会うことはいかにして可能か』。」とあるが、筆者がこのような表現で問いを投げかける理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は6。

- ① 待ち合わせには互いに相手が来るかどうか分からない不安が生じるが、このことが、自他相互のコミュニケーションの成立が必ずしも保証されていないという社会の問題と関連している点を強調するため。
- ② 待ち合わせは理論的には成立が難しいながらもやむを得ず実践されてきたものであるが、このことが、社会もまた学術的にはその自明性が疑われてきた不確実なものであることと関連している点を強調するため。

- ③ 待ち合わせは期待と不安という感情が入り交じっているものであるが、このことが、社会においても期待と不安を持ちながら人間関係を築いていかなければならないことと関連している点を強調するため。
- ④ 待ち合わせには相手の行為への信頼を互いに持たなければ成り立たない面があるが、このことが、人と人との信頼関係なしには社会秩序を維持できないという社会の不確定性と関連している点を強調するため。

問3 傍線部B「待ち合わせという中間的なコミュニケーションは、すべての社会において同じように重要なわけではない」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は7。

- ① 人びとの活動する場所が住居や職場などの機能によって分化した近代社会では、それらの機能とは別に待ち合わせにふさわしい場所を設定する必要があるが、人びとが限られた範囲で活動している共同体では、改めて待ち合わせのための「中間地点」を設定する必要がないから。
- ② 各人の活動領域が拡大し相互の活動パターンが個別化した社会では、自立したコミュニケーションとしての待ち合わせが必要になるが、集団のメンバーの活動が限られている共同体では、他の活動を伴った複雑なコミュニケーションとしての待ち合わせが行われるから。
- ③ 人びとがそれぞれの場所で個別の活動をしている社会では、各人が移動を最小限にするための待ち合わせ場所を設定する必要があるが、人びとの活動範囲や活動パターンがそれぞれのあいだで把握されている共同体では、待ち合わせをするよりも訪問する方がより効率的といえるから。
- ④ 各人の活動時間や活動場所が多様な社会では、共通の指標に基づいた待ち合わせの場所と時間を設定し、その設定から外れない行動をすることが必要であるが、各人の活動内容が把握されており相互の活動時間や活動範囲が予測できる共同体では、待ち合わせの必要性は低いから。

問4 傍線部C「しかし、戦後になるとハチ公神話にも変化がみられる。」とあるが、「ハチ公神話」の「変化」に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は8。

- ① 「忠犬ハチ公」神話は、「いとしや老犬物語」や「ハチ公に変わらぬ愛と真心」といったハチの物語を肯定的に伝える新聞記事によって真実性を持った神話として普及していったが、ハチの物語を「なれているだけ」と捉える若者の声が新聞記事で報じられることで「忠犬ハチ公」神話の信頼性が疑われるようになったということ。
- ② 「忠犬ハチ公」神話は、主人を待ち続けるハチの姿を「忠犬」と讃えた人びとによって神話化されたものであり、銅像や慰霊祭によって多くの人に認知されていったが、駅に通い続けたハチの姿を焼き鳥に対する執着と捉える人が増えるにつれて、「動物ハチ公」神話をもっともらしいものとして受容されるようになったということ。
- ③ 「忠犬ハチ公」神話は、主人の帰りをじっと待つハチの姿と待ち人の訪れを一途に待つ人びとの姿とが重ねあわされることで美しい物語として作り上げられていったが、美化された神話を嫌悪する新しい感性の登場によって、ハチの動物的な習性を強調した「動物ハチ公」神話が対抗神話として作られていったということ。
- ④ 「忠犬ハチ公」神話は、待ち人に会えるかどうかという不安に耐えることの切なさや美しさの象徴として人びとのあいだに浸透していったが、ハチの忠義の物語が次第に忘れられていくとともに、待ち人を待ち続けることを未練がましい行為と捉える感覚がでてきたことで、「忠犬ハチ公」神話の象徴性が薄れていったということ。

問5 傍線部D「待ち合わせは、不確定性と戯れるコミュニケーションとして消費されていたのである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は9。

- ① 一九八〇年代以降、象徴的な意味を持った待ち合わせ場所がファッションナブルな演出によって新しく意味付けし直されていく。それにもない待ち合わせは、待ち合わせが成立するかどうかという不確定性に耐えるものから、流行に彩られた都市空間に身を投じて待ち合わせという状況を消費していくものになったということ。
- ② 一九八〇年代以降、待ち合わせ場所はファッション性や遊び心が演出された空間として次々と量産されていく。それにもない待ち合わせは、相手が来ることをじっと待ち続けるものから、流行のイメージによって選択された空間のなかで、待ち合わせの成否が不確定な時間そのものを積極的に享受するものになったということ。
- ③ 一九八〇年代以降、わかりやすい場所というだけでなく商業的に活性化されていることが待ち合わせ場所の選定において重視されていく。それにもない待ち合わせは、待ち合わせ場所で相手と会ったうえで次の目的地へと移動する行為から、相手と待ち合わせ場所で遊ぶことまでを目的とする行為になったということ。
- ④ 一九八〇年代以降、多くの人が集まることのできる場所が各所に生産され、ファッション感覚に敏感な若者によって新しい待ち合わせ場所として意味付けられていく。それにもない待ち合わせは、有名な待ち合わせ場所で相手を待ち続けるだけの受動的な行為から、待つこと自体を楽しむ能動的な行為になったということ。

問6 本文の表現上および構成上の特徴として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は10。

- ① 新聞に掲載された見出しや記事など当時の資料を引用しながら、ハチ公や待ち合わせに関するその時代の人びとの考えや感性を参照できるようにしている。
- ② 議論の対象である待ち合わせについて、本文の前半部分においてあらかじめその意味を限定し、議論の焦点を整理したうえで考察を進めている。
- ③ 古くから待ち合わせ場所として有名なハチ公像を例にとることで、待ち合わせをめぐる人びとの捉え方の歴史の変遷を把握できるようにしている。
- ④ 待ち合わせに関する複数の研究者の見解を提示したり、複数の具体例を考察したりすることで、提起した問いに対する多様な結論を示している。